

大川が再び元気に

なつてほしい

石橋建具製作所

石橋 正年さん

一年おきに出品している、全国建具展示会で、連続で大臣賞に輝いた。平成十八年に国土交通大臣賞、二十年に経済産業大臣賞である。そして二十二年は全国森林組合連合会会長賞を受賞している。

梅の木をモチーフにする石橋さんの建具が、全国レベルで高い評価を受けるのはなぜだろうか。「アイデアだと思えます。今までになかったデザインを追

い求めているからではないでしょうか。」と石橋さんは話す。

卓越した技術を持つ職人は全国にたくさんいるそうだが、特に建具の本場である、東北地方はそう。しかし、石橋さんは技術とともに、独創性を重視している。

大丸、高島屋などのデパート建築会社の仕事に若い頃長く携わった。「要求が非常に高かったですね。結果として技術だけ

でなく、提案力、デザイン力、発想力を磨くことができたと思います。提供される平面図を基に、建具、内装の部分が、建物全体の雰囲気と一体感を持つよううな、デザイン、色彩、雰囲気になるように、毎回頭を絞る必要がありました。それが鍛錬になったと思っています。」

いわゆる「職人」と違った目線で、石橋さんが柔軟に発想する背景について、「八年間銀行





全国森林組合連合会会長賞
(平成22年)

花模様をコンセプトとして、上部の梅の花と南天を見上げた図柄である。下部は花の葉采を図柄化して花模様とした。又、桔梗の花の切りすかしをしてうめ込みをしてあそび心の中で表現した。



「Japanese Modern」

経済産業大臣賞 (平成20年)

梅の花をコンセプトにたて框の梅切り透かし、腰板の梅切り透かし、板杉に薄彫りしてホネに垂らした紅白梅のバランスと梅柄を切り透かした部分の採光を考えた。



全体的に竹をイメージして装飾とし、地元筑後産イ草を使用して編み上げ、裏面骨格子を透かして採光させた。

「間仕切戸」(竹とイ草)

国土交通大臣賞 (平成18年)

「現代の西日本本シティ銀行。脱サラでこの業界に入ったのだ。ガチガチの職人ではないのである。」
また、作品のヒントを絶えず探し求める姿勢もある。「姪の結婚式が東京の日航ホテルでありました。その式場の壁が非常に印象的でした。カーブのあるR構造の、感じのいい壁面でした。それをヒントに作ったのが平成二十年に経済産業大臣賞をとった、『Japanese Modern』です。」曲面のウェーブが美しい建具だ。さて石橋さんは、特殊な建造物の仕事も数多くこなしている。歴史的な建造物や古民家の修復・復元する仕事だ。たとえば、佐賀城本丸御殿、長崎の出島、清水寺(長崎)、大川の吉原邸などである。佐賀城に関しては、「建具関連、障子、雨戸など八〇〇枚ほどがけています。」これらはもちろんボンドなどの接着剤は使わない。ほぞ通し、竹釘を使って昔ながらの工法で行った。



佐賀城

ほかに、ハウステンボス、アグリノの丘、忍者村、肥前夢街道、教会、病院、官公庁関係も手がける。
「大手住宅メーカーのユニットで、建具の需要が少なくなっています。キャパシティが小さくなる中、こうした特殊な建造物を手がけていけるので、なんとか生き残っていきけていると思います。その際必要なものはやはり、しっかりしたコンセプト

と提案力だと思っています。」と話される。
さて、夢を聞いてみた。
「大川が再び元気になることですね。自分は、大川をもっとも愛する男の一人だと自負しています(笑)。若い頃から市の連合青年団での地域活動を続けてきました。いろんなイベントを行ってきました。何とか地域が発展してほしいとの願いからです。仕事の面で、家具産地大川から多くの恩恵を受けてきたと思っています。いつでも必要な材料が手に入るので。いろいろな木工関連業種が助け合う精神を持つ、このような産地は全国どこにもありません。木工産地大川がまた盛り返していくように、微力ながら力を尽くしていきたいですね。」

